

令和4年3月31日
第582号

今月の技術

農政部 農業経営課

目次

気象災害等を踏まえた農作業のポイント	1
1 水 稻	2
2 野 菜	3
3 果 樹	4
4 茶	4

気象災害等を踏まえた農作業のポイント

これまでの気象経過

◆ 2月下旬～3月中旬の概要

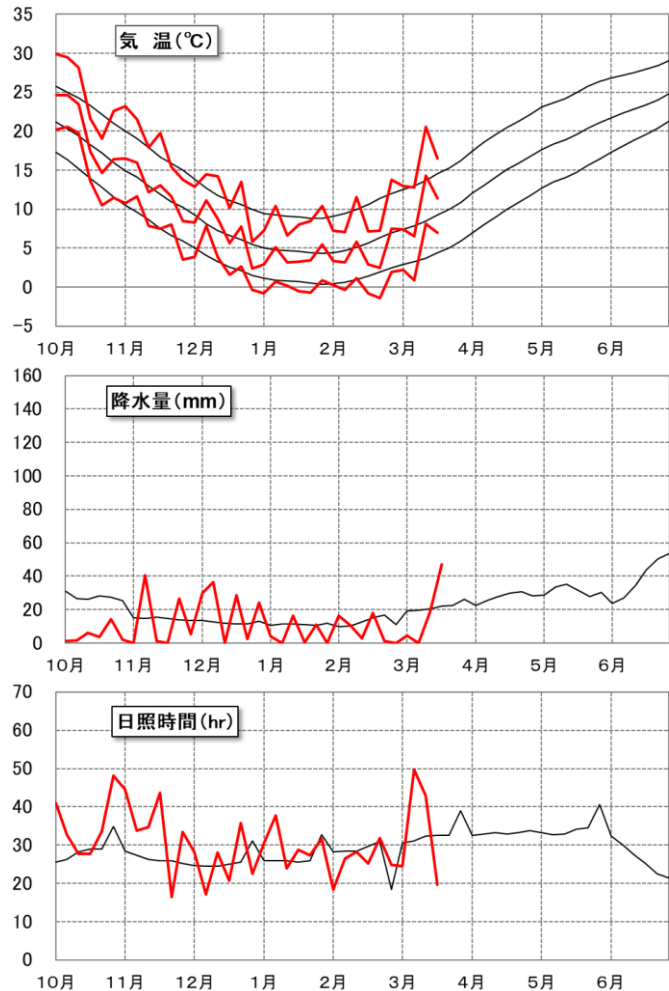
岐阜地方気象台速報

2月下旬は、期間の前半は冬型の気圧配置となり雪や雨となった日が多くなったが、期間の後半は高気圧に覆われて晴れとなった日が多くなった。平均気温は、岐阜、高山ともに低くなった。降水量は、岐阜、高山ともにかなり少なくなった。日照時間は、岐阜は平年並、高山は多くなった。

3月上旬は、前線や気圧の谷の影響により曇りや雨となった日が多くなった。旬の終わりは高気圧に覆われて晴れとなった。平均気温は、岐阜、高山ともに平年並となった。降水量は、岐阜、高山ともにかなり少なくなった。日照時間は、岐阜は平年並、高山は多くなった。

3月中旬は、高気圧に覆われて晴れとなった日が多くなったが、前線や低気圧の影響により雨や雪となった日もあった。平均気温は、岐阜、高山ともにかなり高くなった。降水量は、岐阜、高山ともに多くなった。日照時間は、岐阜、高山ともに平年並となった。

2021～2022年 冬作半旬気象図(岐阜市)



< 平年：細線（黒）、年：太線（赤）>

今後の気象予測

◆ 東海地方1か月予報 3月26日～4月25日までの天候見通し

名古屋地方気象台3月24日発表

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高い見込みである。1週目は気温がかなり高くなる見込みである。

週別の気温は、1週目は高い確率80%である。2週目は平年並の確率50%である。3～4週目は高い確率50%である。

週別の天候見通しは次のとおりである。1週目の天気は数日の周期で変わるが、低気圧や前線の影響で、平年に比べ晴れの日が少ない見込みである。2週目の天気は数日の周期で変わるが、高気圧に覆われやすく、平年に比べ晴れの日が多い見込みである。3～4週目の天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多い見込みである。

1 水 稲 ～高温障害及び低温障害～

育苗期及び本田初期は稲体が幼いため、高温または低温の影響により被害を受けやすい時期である。ただし、育苗期間はハウスの開閉や保温資材等により温度管理が可能なので、温度計を設置し極端な高温または低温にならないよう努める。

1か月予報（3月24日 名古屋地方気象台発表）によると、暖かい空気に覆われやすく気温は平年より高い見込みとされている。育苗期間中のかん水のタイミングおよびかん水ムラには十分に注意する。

表1 育苗期の限界温度と障害の症状

	時 期	温 度	障害の症状
高温害	出芽期	42℃	出芽率が極端に低下する。
	本葉期	30℃	呼吸・消耗が盛んで異常徒長する。
		43℃	20～30分で生長点が枯死する。
		49℃	1分程度で枯死する。
低温害	1葉期	2～4℃	20時間程度で葉の奇形等が発生する。
	2葉伸長期	5℃	5時間程度で伸長が停止する。
	2葉展開期	5℃	5時間程度で葉のしおれが発生する。

(1) 育苗期の高温

育苗期に35℃以上の高温に遭遇すると障害が発生する。症状は、苗の葉先がよじれ、障害の程度が進行すると苗が枯死する。高温障害の程度が軽い苗は、生育が一時的に停滞するが、適切な管理により次第に回復する。苗が伸びず腐敗臭がするなど障害が重度の場合は、回復が見込めない。

(2) 育苗期の低温

育苗期間中、特に緑化期から硬化初期に低温に遭遇すると苗の生育が止まり、生育ムラ、立枯れ、枯死などの原因となる。また、硬化中～後期においても低温に遭遇するとムレ苗（生理障害による立枯症状）が発生する。硬化期における強い冷風は、苗の葉先から脱水するため萎凋枯死状態となり、生育の回復が困難となる。

<対策>

低温が予想される場合には、育苗ハウス等では保温資材で被覆するか加温して温度の低下を避け、折衷苗代で硬化期に湛水可能な場合は深水にして苗を保護する。低温の被害が軽い苗については、薄い液肥か硫酸水を1～2回施用して症状の回復をまって移植する。被害が著しい場合は、直ちに播き直すか別に苗を手配する。

(3) 移植時から本田初期の高温

<対策>

活着期は、最も水が必要となる時期であるため、移植後の灌水が確保できない場合は、移植を見合わせる。苗が徒長しムレ苗のおそれがある時は、葉先を1/4程、剪除して管理する。苗が肥切れした場合は、薄い液肥か硫酸水を施用する。

(4) 移植時から本田初期の低温

植付直後に落水、または浅水状態の水田では、凍霜害となりやすく、枯死株、生育ムラ、生育遅延が発生する。

<対策>

苗の活着の限界温度は12～13℃とされており、移植直後は、風などによる植え傷みが発生しやすいので、冷風のあるときや凍霜害の危険がある時は、移植を見合わせる。水管理を均一化するため、田面を均平にするとともに、凍霜害が予想される場合は、

できるだけ深水にして苗を保護する。

凍霜害が発生したら、風がなく天気の良い日中は止水や浅水管理で地温を高めるようにするとともに、強風または低温時の日中と夜間は深水にして苗を保護する。被害が著しい時は、除草剤の使用を遅らせる。

2 野菜

(1) これから播種・定植する野菜

3月中旬以降は平年より高い気温となっており、3月下旬以降についても平年並～高い気温となる予報である。しかし、降霜の日など気温が低い日には障害の恐れがあるため、野菜の管理には十分に気を付ける必要がある。

①作付前の排水対策

水田転換圃場での作土が浅い圃場や排水不良の圃場では、ハウス周囲に明渠を設置し、防水シートやマルチで被覆し、速やかにほ場外へ雨水を排出させることを心掛ける。また、ライ麦との輪作や稲わら、かや、有機質資材等の施用による物理性改善を行うとともに、サブソイラーによる心土破碎や暗渠による排水対策を行う。

②温度管理

低温が予測される場合は、保温資材等で夜温の確保に努める。ハウス栽培では、昼間の外気温が急激に上昇する時もあるため、高温に注意するとともに換気を行う。

③育苗管理

トンネルは単にビニール被覆だけでなく、その上を保温マットやべたがけ資材で覆う。ハウス内部は二重カーテンを張る。降霜危険日の前日には夕方早めにハウスを閉め、あらかじめハウス内の温度を上げておく。

④灌水管理

灌水に用いる水温が低い場合は、ハウス内に溜めて水温を高めてから活用するなどの対策を行う。

⑤病害対策

使用する支柱、ポット、通路シート等の資材は、資材消毒を実施し、ほ場への菌の持ち込みを防止する。また、気温の上昇とともに害虫が増加するため、発生状況を確認して防除を実施する。

(2) 施設栽培

①高温対策

4月からは日射が一段と強くなる。施設栽培では気温が上昇するため、十分な換気を行うとともに、萎れが発生しそうな場合は遮光を行う。ただし、50%を超える強い遮光は避ける。

②灌水管理

日射量が増えていく時期であるため、特に施設栽培では灌水不足とならないよう増やしていく。遮光を行っている場合は、遮光分を差し引いて灌水量を加減する。

③病害対策

施設栽培では、夜温が上昇し暖房機が稼働しない日が多くなると、湿度が高くなり病害が発生する恐れがある。天気予報で夜間から早朝までの温度を予測し、暖房機が稼働する設定温度に近い場合では、内張りカーテンや外張りビニールを開閉し、ある程度の暖房機の稼働や換気を行う。

3 果 樹

今年の冬の平均気温は12月から2月にかけて低く推移していたが、3月に入り平年を超える日が続いたため、果樹の生育は平年並み～やや早いスタートとなっている。3月29日時点の主要果樹主力品種の生育は以下の通りである。

かき「富有」の発芽期は3月14日で平年より1日早く、なし「幸水」の発芽期は3月17日で平年より4日早い。くり「丹沢」の発芽期は3月30日で昨年より8日遅く（平年値データはなし）、もも「白鳳」の発芽期は3月22日で平年より3日早くなっている。

ここ数年と比較すると、ゆっくりとしたスタートとなっているが、今後、気温が上昇するにつれ、出蕾、展葉、開花と急激に生育が進むことも想定される。生育が進めば、耐凍性が低下してくるため、晩霜害に注意し、事前にできる対策を講じておく。

（晩霜害対策については3月に発行した第581号に記載しているので参考にしてください）

今後、摘蕾作業が早々に始まるナシ、モモや、開花時期に合わせ防除を行うナシでは、作業開始のタイミングが遅れないよう、気象状況を見ながら、適期作業に努める必要がある。

4 茶

茶はこの4月から5月中旬までが一番茶の重要な時期となる。今年の冬の平均気温は12月から2月にかけて低く推移していたが、3月に入り平年を超える日が続いている。

今後の新芽の生育は、萌芽から摘採までの気温及び降水量に影響されるが、晩霜害対策、防除、施肥等管理作業に十分注意する必要がある。とくにこの時期の晩霜害は、茶産地に大きなダメージを与えるため、気象予報を確認しながら細心の注意をいただき、事前対策を講じておく必要がある。

（晩霜害対策については、3月に発行した第581号に記載しているので、参考にしてください）